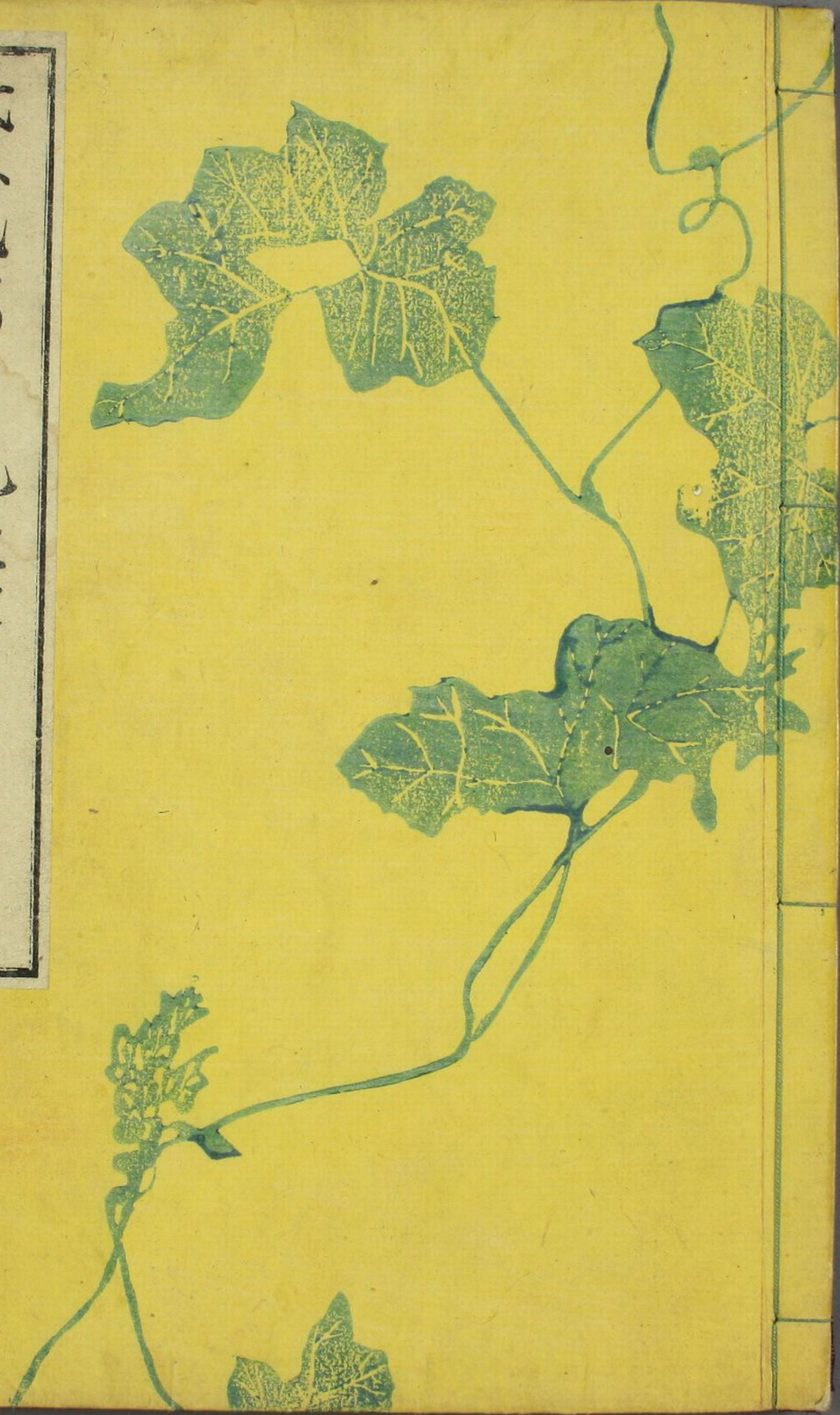


紫式部日記註釋

二



九曜文庫

紫式部日記二の巻
幸ちくなくぬとて上流うちをいふくつうりかきせ給ふせにおと

中野

紫氏香

ちさ葉の杯をたつづひにほうしてまわいらくうつろひたることさなる
えところあそぶあくにうゑたてたるをあはさうけきくほふえとた
はけふおひも一ささぬ(ささちす海に

初夢のとのちにんをなりせにおとろさいせ中にほふすくれてれも
一ろさといやをなくうゑたてたるをいふゆりにをの得うを海へ
一老も退きぬへさいさあくおとろさ葉の花乃めてたさ(幸の老
たむと忘るころちすとなくけふとは陶淵明の詩に酒能祛百慮
菊為制類齡(たつづ申たうまの人乃ををわするといふ葉いゆとせ

お向ふお花のりける。森原三郎よに得あり。今なまはしるしむきうけり

河内抄にそなた故に上候

こなるへ

なれや海へてねんよまのすこしをのりなる^斜なまはしるしむきうけり
をめてなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
あまのこせえきにつけてもなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くてもなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり

こころの自のくまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
たふさきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり

もつちやうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
まにほくおまひつたなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
くまをいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり

いふいほえなほおとすれいなんおひひまなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
ほうちをうめてなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり
水ををいへなれやはナニテなまはしるしむきうけりなまはしるしむきうけり

これにちりきりやうてあきふとゆれと身はいつくもなうとねひよ
せうは

いそはナニツシテドウツシテといふ意にて、形なきをう。あひひよをいひ
しよあひひよをいひえをう。いよあひひよの佛、まにあひひけをう。我
世中の物ねひにうつふをいひ。あけても、明きそとふよをう。
いふ物なり。水なきをいひ。作く。うまひん。のまこにて、深く佛をいひなう。
うまはあひよをいひなう。て世をま。いひたく。いひ。といふ。えをう
いそひたく。う。いよあひひよ。さるうに。次の詞ふ。れも。あひひよ。
いふ。う。とは。いひ。なう。う。た。た。せ。とは。ん。の。寒。と。と。ぬ。う。ま。の。あ。よ。こ
なけいよ。て。つ。けて。わ。る。せ。を。い。う。と。い。ふ。い。う。これ。并。に。我。集。各。を。う。り。は。

いそよといまう。う。れ。は。水。を。ま。ん。を。う。て。い。ひ。ひ。を。く。十。分。を
る。さ。ほ。を。い。ひ。あ。ひ。ひ。ま。う。う。い。ひ。う。う。れ。う。う。ま。う。水。を。れ。う。へ。は。て。に。お
わ。ひ。よ。せ。う。う。と。な。う。

小少の君のふれをた。色とくに。あ。ぬ。れ。は。と。う。た。く。う。せ。は。つ。う。り。も。い。ま。く。
又。な。れ。ま。あ。う。う。う。う。う。う。う。わ。ま。て。な。ん。と。て。こ。い。を。い。た。こと。や。う。な。ま。せ。た。り。け
ん。う。う。う。う。に。た。に。た。ち。う。う。い。た。う。た。に。う。た。う。せ。ん。い。に

濃染紙

雲をかくをむ。う。ま。を。う。た。く。う。い。ふ。う。の。う。さ。ま。し。な。う。ん
う。た。う。ん。と。も。た。は。え。に

ことわうれ。あ。い。し。乃。や。は。雲。を。あ。し。と。な。う。う。う。袖。き。う。わ。く。ほ。め。さ
は。と。う。た。く。う。に。の。は。い。ほ。ぬ。の。考。な。う。又。う。の。け。れ。も。ま。ん。い。條。の。文。句。の。大。む

神の意をうぐくすよれる文なり。といふなり。こゝをわたりては、有のあ
なれば卑下して言をわしと使のせくによつて。とみによめるをわいやくの取
たり。こゝをわしとよと。後小妻といふ。たぢちるいこのまをせえてや
て又小少の許よりこのあをわせたさる。ゆこゝをわたりてはあまの
くくすくしうにわたつた。紙の色はほのなるなり。さて神宮をかくま。味をく
そのあをわたりてをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ

必わとていさう。うたつんと。これは文相をいへん。して。またこゝをわ
たりてやうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ
くくすくしうをわらぐまにともほなれて。物おひにならまらち。わらうんれ

たのめあつてくはくしたる。ゆかまは。よせまて。山鏡に。龍。鷲。首
ゆれつ。たのめあつてくはくしたる。ゆかまは。よせまて。山鏡に。龍。鷲。首

と備うていししりしめしむるに
は、申すは、いししりしめしむるに
曉に、あつたき、あつたき、あつたき
このあつたき、あつたき、あつたき

一、あつたき、あつたき、あつたき
一、あつたき、あつたき、あつたき
一、あつたき、あつたき、あつたき
一、あつたき、あつたき、あつたき

一、あつたき、あつたき、あつたき
一、あつたき、あつたき、あつたき
一、あつたき、あつたき、あつたき

あつたき、あつたき、あつたき

上のあつたき、あつたき、あつたき
なりといひあつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき
あつたき、あつたき、あつたき

邊奏樂と云たり。其の意は、莫くも、その意を、
女房と云は、師のあはさる。あはさるの意は、
を脱せり。文の師は、あはさる。と云は、
は、こゝろ、あはさる。と云は、こゝろ、あはさる。
此程なり。と云は、師のあはさる。と云は、
たゞ、師のあはさる。と云は、師のあはさる。

よは、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
を昇す。と云は、師のあはさる。と云は、
も、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
り。師のあはさる。と云は、師のあはさる。

師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。

と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。
と云は、師のあはさる。と云は、師のあはさる。

そこの中をえきたせばを申されたるはまゝのあそびあつたもの
さぬに地すうれ震うはざいねたしてすまうれたる物なりたう
の中ねえ蒲萄えひさうをさしてゆうしうちねたはこれにほいゆめちやこ
れたるなるして申すゆさぬとまゝの支子ゆさうし葉こ
をん苑りうしうあそび葉をさうはまをんをさう

これより禁きをゆされたる上臈の糸をぬく

あやゆられぬはまゝのねとなくしむるのあそびさうしうなうなと
るぬめして襲ゆめは大海あやなり腰紐のすもものねのさそをや
うにあそびしうこ固文しういふたをさかたさうなうちねいふたに
まゝくはしてねねいせに

水のきい大海をぬたなれぬ水のささうあそびい浅さうこれより
あやゆられぬはまゝのささうをさう

さうた人は葉のぬのうをさうにうは白くあそびさう入をは
すまうへはあそびさうあうさうさうさうにすまう中に白さ
せたるよすうてあそび葉をさうのささうをさう
これよりしうあそびさう

ゆさうをさうさうさうゆさをさうてんぬくしうてさうさうさう
のさうたれとまうては上のさう飛よりぬくしうとさうとさうに
さうてぬくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
はギヤウアコナとさうさうさう

ねんハ帝は家なり。うハ帝を中よるはとなく。心下皆仰し。これとた
しに。い。う。ち。れ。う。人。と。い。ふ。こと。が。家。を。省。さ。し。か。う。な。う。と。い。ふ。た。く
を。さ。な。し。は。よ。う。な。こと。を。れ。書。に。と。う。し。と。い。ふ。今。と。う。し。と。い。ふ。その
い。さ。う。ハ。若。ま。の。を。海。へ。

と。れ。中。と。う。に。し。か。と。の。う。れ。た。は。か。た。を。持。つ。ま。は。れ。う。と。い。ふ。を。れ。上。
う。と。に。し。か。と。れ。ひ。て。ま。掌。ね。若。ま。こ。の。に。う。う。て。い。と。け。せ。う。に。う。た。な
こ。こ。ち。し。う。と。け。れ。た。ま。う。ら。あ。み。を。か。れ。う。う。は。と。浦。に。を。か。し。け。な
り。衣。れ。ま。と。ん。う。け。れ。ま。ま。し。け。う。

母。屋。ハ。屋。う。ち。に。む。よ。と。あ。る。ま。ま。し。け。う。掌。ね。若。ま。の。亦。掌。ね。な。う。け
せ。う。い。あ。う。こ。な。る。ま。ま。り。せ。う。た。な。く。ハ。ま。に。い。げ。や。と。ハ。或。然。う。ん。に。掌。ね
君。の。面。う。ち。あ。る。て。い。ひ。け。な。を。理。た。う。と。ま。う。う。へ。を。ひ。て。出。る。ま。う。今
り。け。ハ。ハ。う。う。浦。ま。し。な。う。ま。ま。し。け。う。衣。の。ま。ま。と。ま。ま。し。け。う。の。よ。は。ふ。て

ま。ま。し。け。う。

く。れ。申。く。浦。に。ぐ。と。い。と。た。ま。し。け。う。上。ま。ア。お。ま。に。う。う。い。れ。う。か。ま。ら
く。太。平。樂。か。て。ん。か。と。い。ふ。ま。ま。し。け。う。長。慶。子。を。浦。う。て。ま。ま。し。け。う。に。あ。ま。し。け。う
て。い。の。さ。れ。の。こ。ち。を。ま。ま。し。け。う。と。ほ。く。な。う。申。く。浦。に。う。え。の。ま。ま。し。け。う。は。ま。の。ま
ま。と。い。ふ。ま。ま。し。け。う。こ。ま。ま。し。け。う。吹。あ。せ。て。い。お。ま。し。け。う。

賀。殿。ハ。長。慶。ま。ま。と。い。ふ。に。樂。の。名。な。う。浦。に。ま。ま。し。け。う。樂。に。奏。入。音。声
退出音声といふとゆへに體源抄に記さる。奏しきといふ樂家にと
之。ハ。い。は。な。中。れ。樂。山。な。う。こ。ま。ま。し。け。う。本。ま。ま。し。け。う。奏。ふ。う。に。ま。ま。し。け。う。

いとくちくもれたるやうがれらち申さたさうさうして池の水をもちさ
らばれらちむきにうへに序あそめたたつちうけりん系命め
れおのさむらめ乳婦かいほしうささえさほつを合はしはいて己
ら

池の水に流さちささくせりて水々々々のりきやえしてちち申さ
たさけさなうとせりやまらふ海をくぬ家なくせらちさむさい海とい
きささむらぬあたらけさにはよほいふこちむらをかき
り流さちえさせけうとささくさうい帯れらちかちほし
うささくさういのししてイナイセウデナリ 流さちけり敷中による

ちくせんに命婦は古院のねき一海とれこれ屋のりまはいとたひくあ

圓融院

アこといふささくさうい海をくささいさうい申さしとさうい
へうめいささういとしてことふあへうはに凡てへたてあなをめりあそ
いぬりさなをたふりあはらうちこほしつへさ

古院のまじりもよにう詞なく圓融院は六十四代の帯なり申さし
いとささくさういささくさういささくさういささくさういささくさうい
ワルイといふささくさうい命婦のささくさういささくさういささくさうい
よめささくさういけし武都のんらひしてささくさういささくさういささくさうい
さういささくさういせぬさうい凡てへたていささくさういと武都のりまをささくさうい
ささくさういささくさういささくさういささくさういささくさういささくさうい
ささくさういささくさういささくさういささくさういささくさういささくさうい
ささくさういささくさういささくさういささくさういささくさういささくさうい

てとうしうきほくまつさ。屋の菖ケイシにまへさうけり。加治通カに。其カし。あ
かれば奏せまほしめり

いせほひて。まにうへとに。とませほひて。とある。そを尾なり。此處にめりて
の下に。作ツクる。海ウミに。種タネを。の。り。て。つ。る。へ。一。ま。つ。る。を。此。傳ツタに。齊イサ信ノブ卿
と。た。ま。と。そ。は。中。支。小。官。人。と。つ。へ。意。を。此。は。一。人。の。ま。ま。う。に。居。此
菖ケイシの。道。長。公。乃。菖。人。なり。ま。ま。さ。う。け。り。い。さ。た。ひ。重。子。傳。授。の。旨。に。に。
骨。身。人。を。え。う。り。な。り。加。治。の。位。を。ま。ほ。と。な。り。あ。ま。の。ま。ま。は。う。て。既。女
して。骨。身。人。を。併ヒと。兼。内。一。つ。ま。て。ま。て。め。し。お。を。ほ。ひ。し。
あ。た。り。一。ま。ま。の。い。ふ。ろ。こ。ひ。ふ。ら。れ。上。ま。ア。い。き。つ。れ。て。相。一。ま。う。ほ
ふ。友。原。を。う。う。と。こ。う。れ。た。い。列。女。を。た。ら。ほ。ほ。う。り。り。

あ。た。り。一。ま。ま。の。い。ふ。ろ。こ。ひ。ふ。ら。れ。上。ま。ア。い。き。つ。れ。て。相。一。ま。う。ほ
子。為。親。王。と。ある。を。い。ふ。後。は。又。の。日。ま。の。菖。司。別。當。な。と。人。を。識。さ。た
ま。う。り。り。と。ま。ま。たり。う。ち。れ。上。ま。ア。い。民。乃。上。ま。ア。は。て。道。長。公。の。う。か
ら。なる。菖。氏。乃。人。を。な。り。菖。原。を。う。り。ま。ま。と。い。不。比。等。公。は。男。子。四。人。を。回
に。と。けて。菖。家。小。家。武。家。系。家。と。名。つ。けて。三。代。道。長。公。は。房。弟。々。れ。流
に。て。小。家。な。れ。は。を。解。の。三。家。の。同。一。氏。な。り。と。ま。ま。と。う。れ。た。ま。ま。と。う。れ。た。ま。ま。
い。ま。ま。ら。ほ。ほ。え。ほ。と。ま。ま。

つ。ま。の。人。森。崎。に
あ。ま。た。史。記。中。の。侍。臣。に。同。人。と。して。齊。任。と。こ。に。い。ふ。は。あ。ま。の。ま。ま。と。う。れ。た。ま。ま。と。う。れ。た。ま。ま。

齊信卿 皇太后宮公任卿 源経頼 實成卿

右未の邊、兼中又太史にても、こたひ別當になりて、此の親王流の邊なり

齊作々公任々、二人とも別當にたり、此の親王流の邊なり

まうが階は、是れ北、親王流にたり、此の親王流の邊なり

すけ、こゝも親王の傍に、此の親王流の邊なり

中又権亮権亮のよ、此の親王流の邊なり

持亮、少くもあつて、此の親王流の邊なり

い、此の親王流の邊なり

事ねをが階、此の親王流の邊なり

こゝに、此の親王流の邊なり

ま、此の親王流の邊なり

い、此の親王流の邊なり

ま、此の親王流の邊なり

い、此の親王流の邊なり

こゝは、此の親王流の邊なり

この親、此の親王流の邊なり

めて、此の親王流の邊なり

うけ、此の親王流の邊なり

申ひなとしたり

おほ文 東三條宮家女御に於て所為給子一條は 皇太后宮をうなは しのはナ
院に所母后にて東三條院と申はれり

ニヤカヤノとらふえとてふしと申ひしなる所五十日後式のをうを

れは發あけたるまをさう

さうえのいゆらなひは 大納言をまひんぐにようてまわすえたりちひさ記いた

いれ^五とよい^著のたんすもゆをまひひくまあまびの^具ごとの申掛しうひ

んぐれまのいゆれまにすこーあけて 寺内侍中務命輝小守の表などさ

ごうごうささうごうごうまわなにかてささういん後^{若言}ごうごうひか補れ

めれとさ申はらごうごういゆらちりたり^{若言}ごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

とあ^{倫子}ういごらうつーごう^{若言}補ひてわざ^{若言}ごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

ひとにめてたーあさうのういゆれごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

いゆらうたごけなをさあまれに申大まいえびごめれ^{若言}ごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

こうちさまゆ

さ^{若言}いん後^{若言}ごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

ととごういん後^{若言}ごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

をを補さしたるなりごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

カソレオホイモツタイナイとごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

えいごう

後とらひてまわし給ふえさあめのをいさぬ乃ひういれたぬのにしれたまをさうい

ゆふたところれ大はとまわし給ひてごうごういん後^{若言}ごうごうひか補れ

右大臣頭光内大臣公季

ひまをよわひり。と波をいひてんはへ。物も。湖月女に。物も。と。わ。悔。つ。ほ
し。と。と。と。あ。の。物。忌。と。と。字。を。ま。て。は。簾。を。と。り。つ。け。て。あ。う。さ。な。と。な。せ。し。
つ。い。と。さ。う。と。え。さ。う。う。その。の。の。れ。さ。う。を。い。河。海。女。に。く。さ。う。この。こ。ろ
は。書。に。い。と。あ。また。名。な。と。さ。う。い。の。の。と。い。中。ま。の。な。う。と。は。簾。の。よ。と
か。り。さ。う。い。ゆ。つ。に。中。ま。う。い。ゆ。い。ゆ。を。ほ。ひ。て。あ。は。し。と。い。は。は。
ん。お。ま。に。い。や。く。ほ。ひ。し。と。い。ふ。お。ま。に。い。や。く。を。ほ。ひ。さ。う。い。ゆ。さ。う。い。ゆ。さ。う。い。ゆ。さ。う。
と。も。橋。を。へ。い。初。花。を。い。え。さ。う。ら。の。あ。の。ほ。を。い。は。く。東。の。つ。ま。と。い。ま。海
て。か。ほ。う。と。あ。を。ま。い。え。は。ら。を。ほ。ひ。に。や。い。あ。う。い。の。い。ま。い。
中。ま。と。い。ま。さ。い。脱。な。さ。う。

女房もたへ。い。わ。か。さ。い。さ。たり。い。は。と。を。き。う。ほ。い。あ。う。て。か。ほ。う。人。

よりい。ま。あ。け。ほ。い。大。納。言。君。守。ね。君。こ。う。ね。君。文。内。侍。と。か。ほ。う。

持。う。ち。あ。な。う。て。ま。い。た。と。と。東。の。間。に。あ。う。て。か。ほ。う。人。い。東。の。間。に。簾

を。あ。げ。池。の。前。に。あ。う。て。か。ほ。う。人。は。池。の。間。を。あ。う。て。ま。い。

右のね。と。う。て。お。ま。い。は。ほ。う。ら。ひ。ひ。さ。な。ら。と。た。れ。ほ。い。ま。な。さ。う。な。う。と。つ

ま。い。ろ。ふ。と。あ。う。て。あ。う。さ。を。と。う。た。さ。れ。い。の。ま。う。た。な。さ。う。お。ま。う。う。六。大

う。う。け。と。う。て。持。を。な。い。い。て。ほ。う。う。い。ゆ。う。た。ひ。て。い。あ。せ。ひ。さ。あ。さ。う。う。ま

れ。と。い。い。と。い。ま。

ほ。こ。ろ。い。え。ほ。こ。ろ。ぞ。う。い。だ。な。を。い。ひ。ひ。さ。な。ら。い。引。断。を。う。さ。な。さ。う。い。

の。齡。に。盛。り。ま。さ。な。を。い。ゆ。つ。に。い。ろ。ふ。い。女。房。も。の。さ。う。あ。う。さ。を。と。う。

い。女。房。も。れ。庭。を。へ。い。これ。大。き。の。盛。り。ま。さ。を。移。ひ。ほ。う。に。あ。に。り。に。

おをさしぬたをふれし清きをそなたにさしつたり。暮山の僧鳥小
鳥の音なり。これおにまにねいひるまうはとよめあうたあふたの
こやあふたのこやまうたふなり

摺のつきの梅のひんりのしらをに衣貴賀郷たおよきて衣のつ梅袖くらうせへ
泣くくさ人よりとなく。あひのよさかをあつりさこえ又たさうとい
なとあひつうてまをたえよくとさくさくあめく人よりとげふり
ねをすしあめし

衣のつ玉袖くらひあに如唐きたつゆをかきたきつりよめをさ唐よ
れ表よ摺ひなる衣のつ玉袖にたり。又た水とをこの流れたかを
あいていそた水くふく人あえさなとあひつうてとよさうと

さうていそとあひつうた。肝いた水とめと水さの術をさう省きてよく
まこえあつてい文詞とをほえ。流本をいたまとうはをさう人ふ唐の中を
れは流さるる流えんかとおひつうてとよさうといをれなうつれにも、
れ酔きれたをあつてとよさうた水とにま水つとてさう
まれよめく人よりとこのお大おはおさうらねとさく摺れ流すとい
まをさう。まれをまれと甲くまやとなく。いよめくはつウリウガルなく。け
いおに人よりけふとを甲く摺りたうとさう。係年の梅めくは
うさうたう。人よりよほそめさう
まうまうまれせんのかをまおはおら流すとまのよさうひめのおとせす代
はこすたぬ

不承くはさすくはほりては源や物語の類の中に
君にたふ人まは一人もたふ世中此女のほんとまはすはあつたは
おそくまをさすくはほりては源や物語の類の中に
まはすくはさすくはほりては源や物語の類の中に
これ或うを最の縁もあはれはむとされとはよひなぐりとほりて
にそなる文によつておのれいふもんとほりては源や物語の類の中に
ほりては源や物語の類の中に
人とよまをさすくはほりては源や物語の類の中に
はらうすくはほりては源や物語の類の中に
えんのまをさすくはほりては源や物語の類の中に

一に源や物語の類の中に
ほりては源や物語の類の中に
人とよまをさすくはほりては源や物語の類の中に
はらうすくはほりては源や物語の類の中に
えんのまをさすくはほりては源や物語の類の中に
とほりては源や物語の類の中に
三佐のすけうすけとれをあるに信託事なちて内行成のねをみれそす
三二よりたをさすくはほりては源や物語の類の中に

おにほりては源や物語の類の中に

あーむれをひーあれは若う代のちをみたるうらとて
こはくろのほつとあちにもたほしけくものさ福をればいとあえれふこ
とさうなり

ねさろーろさハハ碎へ係りしきほつさ福のあろーろほつなり
をりことさつひさ水の優式のそつなりとてさへ隠れたるはか
道長公のよくのけをほつとて入するに適さーとてほつこ
ほつとてさハハ教ゆてさつひの奇しき初日はナニミドウニテと
しよさほつつらくさつ詞なりやちとて彌千森ほつほつかたさかノ
ハ限りなき彌千森のあほりに入りたる若さつり末の事代ハハ人

とすれともナニミドウニテうほつとてさつとてさつとてり末をほつひま
なり又初日にさつをさつとてほつとて終るにほつとてこの奇後東今集
類にいまりあえれさつとてのよれを道長公はほつとてさつとてハハ
ほつとて道長公のやとてさつとてさつとてさつとて初日のあしたつハ和名
抄に唐韻云鶴音零揚氏抄云多豆今按鶴別名也とてさつとてさつとて
奇此言は枝をさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとて
てこれさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとて
つらさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとて
も後拾遺集にさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとて
あーたつ乃齡はあさつとてさつとてさつとてさつとてさつとてさつとて

いふてあーたつれ難いあれうしと難い様ふ意こもれり。決りなげしよ
さ海をればと出づるを思はあへんうさまかりて母申すはうはツレホドなり。
たげしよとの子海をればと出づるを思ふ意の海を思ふの海を思ふとふま
なり。されとあれそのうたふさううてうさあへんといふとあーめしげこ
とのあまぬまをうたふしはひたさすとも母申いとあをれにともなりなり
といさやうにふしめたるはあうと海を思ふてイツノ感ニタヘテオダウリナリと
思つたり。この海にうたふてあへんはれとふ思はれり。いとさうさ平によ
る本を思ふいとさうたなくはあへんといふを思はれり。初花を思ふいとさ
うを思ふとふれえとふたり

けふくめてさやーさこえはふにんをいならつれうさうと海を思ふとふれ

お代もあえ海くく海伸くす名れうにさうぬあちになふおむひついはいさ
けふといふくめてさやー海を思ふを思ひてさうなりうさうとふはいさうさ
お代もさやーさこえはふにつけてふれ事物乃それなうりて揚とふ
あえ海くくはアカリさうなり。海り東は若ま乃さう。海を思ふぬ式物
さうさうれうか。あひついはらう海り東は若めたるさう。海を思ふ今
あひついはらう

長
文のたきさうさうにやつさう海つれり。我はあへん海にてまの海に
さうさうに海を思ふさあてまのさうなう。またさうを思ふさあてありと
あひてあへん海ふあり。さあを思ふはまうさう。とれおひためり。とたさふ
れさうえはふさあさあを思ひ乃海それなりと名申さるることさあをけれ

かりあつて一とついでに言ふれしと云ふほどあつて、城に於いて二
日、うらやまてあやにふとよきさう。一とついであやにふあつたり。
言ひつゝも此の、ブルボトシクイタクフレリといふ言ひなり。
然るに、彼等は、大後、に、元家、或ア、を、此、う、備、の、備、の、君、に、て、ね、を、守、る、こ、ろ、
こ、の、の、西、原、申、を、せ、給、ふ、に、こ、れ、武、ア、を、ま、あ、り、給、ふ、さ、う、な、り、九、条、後、さ
う、を、言、ひ、て、人、く、あ、ま、り、さ、う、ひ、て、こ、う、な、を、給、ふ、つ、い、て、に、冷、泉、院、の、は
ら、ま、れ、な、り、備、一、な、ほ、と、あ、て、さ、ぬ、な、ら、し、い、く、と、ね、あ、し、中、に、九、条
後、こ、の、ひ、乃、す、さ、う、く、つ、う、備、つ、ん、と、ね、ほ、を、備、に、こ、れ、を、う、備、れ、給、
ふ、を、言、ひ、と、ね、に、こ、は、さ、う、六、也、こ、を、さ、う、な、を、給、ひ、け、に、た、つ、に、い
て、さ、い、れ、う、あ、つ、と、あ、り、人、を、さ、う、い、ら、し、い、て、さ、や、一、給、ひ、さ、う、い、ら、し、

松の葉紫にたよりさあ
やいむをにひり、と又

つと、い、み、と、ね、ほ、一、な、け、ほ、に、と、め、と、同、一、彼、等、を、う、大、後、を、備、と、い、て
さ、な、る、ほ、を、一、と、あ、つ、て、さ、う、い、ら、し、い、と、い、ふ、言、ひ、なり、
一、と、備、を、な、さ、う、い、み、一、く、に、さ、う、給、ふ、と、人、の、言、ひ、う、と、さ、う、い、ら、し、
言、ひ、つ、か、ん、数、中、平、に、よ、し

又、こ、ろ、を、死、す、は、の、あ、ら、を、さ、う、い、ら、し、い、と、あ、つ、つ、う、な、を、い、ら、し、い、ら、し、
こ、ろ、つ、い、く、に、な、あ、あ、り、う、う、一、の、花、を、此、を、も、祢、を、も、春、秋、に、申、死
う、を、言、ひ、さ、う、月、の、影、を、言、ひ、を、言、ひ、た、の、影、に、け、り、と、は、う、り、給、ひ
と、死、す、

又、こ、ろ、を、死、す、は、中、ま、れ、な、さ、う、の、い、あ、り、さ、う、い、ら、し、い、ら、し、
以、原、に、あ、つ、つ、う、は、は、さ、う、さ、う、と、い、ら、し、い、ら、し、い、ら、し、

とおしとていふもすすちカクハツなるもいふはうれしううあひうたえ
 うりせとはいつうれ月意ゆてのうれたまをとなうはゆてサウモアとい
 ふほよの意をうれせとなくいふはとまひりきとていふをせよさけ乃
 意をうれまひりきとていふりきとて我身にいさうけてなり
 うちらにおううをうて見れま見りやうはをれほにあさゆくあそれ
 なまう一人れなまひりあうと我をぬにたをなくふあささうのとおひ
 ねほくとねそくにせれまううてえれとつれせに
 うれお禮を物被書かうゆれあひ乃ほきうりいれやとふにうてこれ
 と書ゆれあさううまうにえりやうにまあうはとなくあさゆくあは
 水をういあまにやうほれすれたをぬいおさゆくとあそれとふたつ

にはあういっけをサゾをうれまをういふ象集に暮相而朝面無美隠尔
 カ加々とおはいひをあてまううて西月なまをいひたてあををい
 うひたていさのまつりく西月なまをいひたてあををい
 ひ又たてオシラツヨイといふまをいひてツラカハアツイといふまを
 味を味ぬ物被にうれまをすてゆいひけらうゆれぬまをいひてまを
 すいとひひけらとて西月なまをいひたてあををいひたてあををい
 にはあういっけこの外中書被書とていふまをいひて西月なまをいひ
 にはあひねすうんとい今は中まを任れといひてあははあはう
 ぬえあうてぬのうあさゆくとあそれなまう一人れなまひりあうう
 せうくまうなまをあてにいひうれまをいひたてあををいひたてあををい

うなる人のこむこむはなう〜
はは〜んをうき御〜くあま〜
こはばうかをなう〜
大納言もこれらうくはは〜
うま〜いりこひ〜

我は亭にて中まの〜
にう〜
又れ〜
おひ〜
〜た〜

う〜
初〜
を〜
〜
〜
〜
た〜

う〜
う〜
う〜
う〜

うらさふい鴛鴦をいと乃上毛にわく雲状となり詞はもなき川よ古れあ
にえりおとねほ一二の式ア其里亭に遊むはとされ友達のなきさ
らさうづみい或アとあうあアとさう鴛鴦の或アにたたりさて
上毛の雲をうち拂ふに友達のたれを此寝巻にえあうあア一最
をこひいとおとさうは深酒本とけいさたれたのなむに文乃これ
さ海本とけいさういあうあア十分ナタうまにこれあ二三とや彩勅
撰集に入水

書を所らんてさういそ海をなすよをかえいしくいへし海を流よと
人こそ流けり

ゆらんてい中ま乃所愧してさうらうさ書おうてさういさか一と或ア其

区おさけい海を流よとさうさうとを人よかすれこれ中いひおせ
なさうまれお何え君の返いと同めをい

とけり人おいさう些こにさうらうあし一たひなれはさほ一にわは海
さうい海わらんいあういさういさういさうい海わらんいさうい
たまはたされおさういさういさういさういことおれはさた一けさうい海
かりぬ

消息とい文をさお海をさうい作ささういさうい一たひさしいさうい
さういさういさういさういさういさういさういさういさうい
んとはさういさうい或ア此いり一視るをの疑ひさういさういさうい
さういさういさういさういさういさういさういさういさうい

は式アうんたひなま水まきまきうに作らんとをいふたしけなくおまひ
てふれ家なりまてひんまをなとはあかまをうやあひていふ物なれい我
らうよをぬん中し初に格なるをぬにうく物いすては格をたうひてひ
うとまう。むあまきく様まきしよまにのたまはたらなはてさの様まき
まう。まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

いそはは十七日をういぬのとれたまをうつれとまきく取ふけぬ
中ま内書にひくで流しなり。日本記畧に十一月十七日甲戌中宮入御内
裏本宮設饗饌屯食とも見えたり
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

ひうーれいさーにうちれ女房を十よ人まをひのいさーれつはとへた。ぬり
まのほかにあれと。理をいれてあつたまきまきまきまきまきまきまきまきまき
ちれ女房いまの内裏れ女房う。い途へれたまをいして。まきまきまきまきまきまきまき
いこーにまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

中まれい興にめはといぬとらうれまをいいたうく。信従の宣をまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
いとけのい車にまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
倫子と若女と乳母のお輔と三人まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
大納言穿お着こまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
これ二人ユカ子まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

つらねる馬にこかね文内侍

こしきい二人なり

つぎにうほの中ねとけりなをこるきんとけりなりとさひたりし種あ
なとくしとてさうあうさほむりしうねゆいけりし

これにえ馬中ねと或アとありさうきんとは或アといむつゆうぬ中兵又
あよに帯はまにすてあかあもさうとれをさうりにしれさこれとかの
こうなくとせつとんとさうきいとけりあさあこれと同一くす
ハチヤクモをさうきんととい一家あといはモツタイラミキなりこれに
この馬中ねをさうきんとさうはんをれとめて物身をさういあうなる
なるをといしとて一家なり又あよにこれ或アにこれ次乃車なるとさうへさ

ふらさるをさう水をさうてう馬中ねと同車なるをといしとさうに
もさう申しよ次ふしとさうとさういなるしとあれは程さにはあり
さうあうさほいせうゆいさうさうさうさうはねむつしうとあにある
にねを

とのさうこれゆね赤内侍次小左兼のなしとあえしとさうふとほては
しだれしとてつとくはまののんにさうけ

とのさうい官名をい尚殿典殿れうちをいしこれと赤内侍と同車なり次に
左内侍以下三人同車なりさてこしきい身のほとさうしとぬ如房ともな
れを車に決方をさうしとてさうしとさうしとさうしとさうしとさうしと
さくんにさうなるなりとさうのいさうさうさうさうさうさうさうさうさう

んこそりのけりとは

月れく満ちたふいふ一はさやとれぬいつあ一をせしなりうはの中ね最
をさたになくたれば申く一うたにせし一うはうたれう一うをさる人
まうう一まをひーらふ

ふも内裏に申さるきて車らりなりて局までうらめてあ申むほどなりい
みーはさやい月れくまをせにうれなくるれんよをいひ一のはとれ
めをさる一まをさるうい意きて歩むまほをうたなく一まいりてこれに
つうなくも兼因をさるまはにま馬中ねぐく老る人をもはにま一
まにまら申くをさるまにやまら一くも一終う一うはれにま一まを
まのまひーらしてまう一まをさる

ほ御持

ほ持よこのうちに入りてふ一たまはこがねをわけておほく家あうこ

酒のうたをさるひつすまな衣もね一やりあつあつてまをさる
いとうに火をさるいして身といえにままをさる一たをさるまをいふに

ほ持よこの花宴まにもるて河海抜にぶらう身三にあつる戸なく一
つりあつあつのはやまのち様小禁中をうらとあるたうりなほのまをさる
はい中まの四あつてまをさるまをさるまをさるまをさる一あつとまに
なつてソレデモヤツハリとらふまをさるまをさるまをさるまをさる一ま
はをさる一すまなまあつたをさるまをさるまをさる一あつたまの厚く肥ま
一後ねほく入水てふらうまをさるまをさるまをさるまをさる一まをさる
一たなさとらまへ一まにまをさるまをさるまをさるまをさる一まをさる

和後和成郷宰ねん源経房郷宰お中ねさん公信の平ねおとつぎくになりさつとさうふ

中とさうふらひえなればとねえしやみまやとねゆふを人
といさうに経なまへ

信後宰おとしも実成合をへし中とさうはかへりテマイワウことりあさ
なりねゆふをの平になく人をねとあひねすなはと徳を入しとん

いとあしたふさめり信んおらひえなまきく身とすさて信なとことか
ひつあさこのらん陣れさうら

あう人に武アめりくす相さういとあしたはアサハヤウとささなはて明
あうふさめり信んおらひえなまきく身とすさて信なとことか

なりふとがしをコトナサウニなり陣陣屋なりいづそこのをいそ
にてこれ人にあしらふをあむらうくさしてなへしおとさへし
かへ平にらぬ

たのまうらとねんさまたさうればと人ねはとあひたうらぬ
らとては信くは

ひそ三のにおしてたにさうてららひ中まのぬ送りしあうてとておぬ
いささうまねあをあえておよんさうなにもさうはトホボトといふ
てんうにさうぬまねあをいさうをたうさうみ家ね入といさうさうのあ
といふさうぬまねあをいさうをたうさうみ家ね入といさうさうのあ
いさうさうぬまねあをいさうをたうさうみ家ね入といさうさうのあ

くさきり。我身にきよきり家路にきよきり人たはぬぬとすに
いささか我の人たはぬぬとすにきよきり我もたはぬぬとすに
りよもたはぬぬとすにきよきり今もたはぬぬとすにきよきり
うらもたはぬぬとすにきよきり決まらぬとすにきよきり

大ききせせありきよきりかたきよきりあてにきよきりけせらきよきり
しきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり人乃はとらぬぬ
いひのきよきりきよきりきよきりきよきり

大ききせせありきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
きよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
きよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり

なるをいひ父若くは人にいひきよきり考へにきよきりきよきり
しきよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
よきよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
のきよきりきよきり

きよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
しきよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり

このきよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
しきよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
きよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり
きよきりきよきりきよきりきよきりきよきりきよきり

てまこととありいたるはあつて一にけうたつたはまゝと古今
後撰集拾遺抄抄のふとのほめてふにつくわ^{行成于時大弁宰相}の申納と延轉と
たのくまゝ一いしつふにらんをめてつゝを造り

あつたはと一いしつふにらんをめてつゝを造りたつ草子にやま
しといちあてたなかうその中いあう以下三葉のふをうたつて申す。拾
遺抄の勅撰を拾遺集といふ事と古風辨抄に大納言と但々拾遺集
を抄して拾遺抄と名つけしとあつたをへて抄のふといふ三葉のことなり。
まゝをて紙をみ紙に造りたつ今いふ冊をう。延轉の法所をう。傍
かに足申行成の紫花抄はまうたの大納言と名をてつゝのうらう今
と名たつて延轉と次小足とたつ延澄とそれ小次郎あつたのまうた。

いしつふにらんをめてつゝを造りたつ草子にやまといふをめてつゝ
まゝといふ物のほま一葉乃中を草子の又紙にあつたこの二人小うを造
りといふたつて。抄のふといふのは、紙が二平によ。

あつて一いしつふにらんをめてつゝを造りたつ草子にやまといふをめてつゝ
^{元補}まゝといふ物のほま一葉乃中を草子の又紙にあつたこの二人小うを造
りといふたつて。抄のふといふのは、紙が二平によ。

表紙紙といふを草子に装束なり。たつて表紙乃羅と申す。羅は
韓組紙紙なり。一能宣は大中長元補は清原氏なり。つ後撰集をう
いし梨壺は女人乃中にて同姓の人とす。いしつふといふは元補は永祿
二年能宣は正暦三年に卒つたはれ。この紙をいしつふへといふといふ
は、このころ乃中らんとて紙なり。

えん清原正澄んとちうほくの君とうにたはまのまのほしてこれだまらうとて

うまほくまへんしらぬまへまこしなまほくいほめううまほとをう

まほくまへはつらつらこ三テオイテとくまふてまほくう書だんだんに

それ乃まほくをうまらこれんまこの人まほく銀の人にならしてさ

しまただまほくをうまらしまらううつまにめてつまほくまへまほく

にせまほくまへうつらおこの月にあつまほく備中に番とらまほく

負まへまほくまへまほくまへまほくまへまほくまへまほくまへ

はこナイミヨウノ物にしなまほくまへまほくの人まへしらぬまほくにうい

ほめううまほくまへまほくまへまほくまへまほくまへまほくまへ

ううこれまほくまへまほくまへまほくまへ

